暁の町

武田麟太郎作
林唯一畫

(121)

工場の内外 (五)

ステヤで目をうち据えようとする西川の顔を見たその女は、レールのようすっとうかがいこんでいきり立つて来る。

「——どうするつもりだい、このおきんさんを殴らうつて……卑はせやがらア、さア、好きなやうにするがいい」

まさしく汚れ捨て掛けてあるものの、撃り取つておきんにちがひなかつた。撃き取られ風に、ふらふらしたから、敵匿も恥辱にお顔をふつけるのであつた。

いつ、人だかりがしてゐる。巨漢、おとしないよ、大人気ないからね、怪うつてゐる。人間の年寄もあれば、何だい、そんな大きな口してゐるつはのしちよへといきり立つ、おきんと西川の若ものもある。

西川が逃げも退きもならず、唯ぶるぶるしてゐるうち、うまく仲裁が入つた。

「——どうしたんだ、一体」

割り込んで来たのは、すぐに事情を察した。

「——おきんさんを殴つて啖呵を切つたんだな、困るやうなかつたんだな、困るやうなかつたんだな、困るやうなかつ